
Love,Dream,Happiness

はるやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love, Dream, Happiness

【Nコード】

N4703Q

【作者名】

はるやん

【あらすじ】

幼いころ、父親の影響で野球を始めた翼。 そんな翼が中3になった秋、綾と運命の出会いを果たす。 その綾と甲子園に行くという約束をする。 はたして翼は甲子園に行けるのか・・・二人の未来はどうなってしまうのか・・・ あの芥海虎之助が太鼓判を押す純愛スポーツ小説！

0話：プロローグ（前書き）

まえがきはかなりふざけてますが、小説は真面目に書きました。

0話：プロローグ

「翼、早くしなさい」

一階から母さんの声がした。

「うるっさいなー、分かってるよ」

今日は中学最後の大会だ。翼は幼い頃から野球をやっている。

中学校に入り、野球部に入部すると中2の夏には既にエースになっており、その才能は他を圧倒していた。そんな翼にはいくつもの高校から推薦が来ていて、将来翼が入学する帝都高校も翼のその素質にほれ込んだ一つの高校だった。

「今行くよ」

階段を下りてリビングに入る。

「何だよこれ」

リビングに入った翼の目の前には豪華料理が広がっていた。

「あら、今日は翼の最後の試合でしょ？ ちょっと気合いを入れちゃった。」

翼の母親はおどけた表情で舌を出す。

「気合いをいれたって・・・朝からこんなに食べないつつつの」

「まあいいじゃない」

翼はあきれながらも目の前にある豪華料理を少し食べバックをからい、家を出た。

「いつてらっしや〜い。頑張るのよー!」

翼は母親に手を振り、グラウンドに向かった。

グラウンドには高校のスカウトを始め、プロのスカウトもちらほら見える。それもそのはず将来。日本のプロ野球を引っ張って行くであろう二人の対戦だ。

白鳥翼しろとりと友沢はまだ中学生ながら、人間離れした身体能力の持ち主だ。その能力にはメジャーの球団も注目しているという噂まである。一般の知名度はないものの、プロのスカウトでは知らない者はいない程、この業界では有名な二人だった。

白鳥は130？後半のストレートを中心にスライダー、そして緩いカーブを使って三振を取りに行く投手で、友沢はスピードこそないものの、緻密なコントロールで打たせて取る、そんなピッチャーだった。

藤元もまた二人の対決を見に来た高校教師だった。

（友沢はあかつき大橋に行くって情報だし、白鳥も県外の強豪に行くだろう・・・）

藤元がいる帝都高校は数年前こそ甲子園の常連だったが、一昨年設立されたあかつき大学附属橋高校は理事長の意向により強引ともいえる選手補強で県内県外構わず優秀に人材を集めてくる、そんな学校だった。おかげでいい選手はほとんどあかつき大橋に取られ、かなりの差ができてしまった。

でも今年は優秀な選手がそろったし、良い投手がもう一人入ってくればあかつき大橋を倒す事も夢ではない。そう藤元は確信している。

0話：プロローグ（後書き）

14才の処女作です。どうかコメントして頂けると幸いです。
1日一話で更新をしていく予定です。

1話：出会い

俺は朝食べた豪華料理に腹をたぶたぶにしながらも、自転車で試合会場に到着すると、早速アップを開始した。

予選は先日行われ、ベスト4までを決め、今日は準決勝と決勝だけ行うことになっている。

そしてベスト4に残った俺達は準決勝に挑む

見事準決勝を勝ち進んだ俺達の決勝の相手は強敵の暁中学校。

ここには俺がライバル視している友沢がいる。友沢と俺の実力はほぼ互角。

試合が始まると、俺と友沢の投手戦だった。

試合が動いたのは7回、友沢が四球でランナーを出して俺に打順が回ってきた。2-1とおいこまれた俺は一度集中し直し、打席に入った。友沢がセットポジションから4球目を投げる。ストリートが甘いコースに入ってきたので俺は思いつきりバットを振り抜くとボールは高々と上がり、風に流されてスタンドへと入っていった。友沢は表情1つ変えずに涼しい顔をしていた。

試合はそのまま進み俺達の中学が優勝した。そして家に帰ると案の定母さんが結果を聞いてきたので優勝した事を伝えると「あら、おめでとう、今日は腕をふるわなきゃね」とか言ってキッチン方へ消えていった。俺はクールダウンを済ませて帝都高校のパンフレットを見た。そこには野球部の監督と野球部のスローガンである『明るく楽しくそして勝つ』と書いてあり、その下には野球部員が最高の笑顔で写った写真が貼ってある。

「明るく楽しく、か・・・」

その言葉に引かれていった。俺は野球をやって楽しいと思った事が無かったから、とびっきりの笑顔で写っている野球部員が羨ましかった。

一階に下りてリビングに入った。

「母さん、俺帝都に行く！」

母さんはびつくりしていた。

「本当に帝都でいいの？あそこはここ何年か甲子園に出てないわよ」
母さんは俺が甲子園への強い憧れを知っているからびつくりしたようだ。

「大丈夫だよ 推薦が来た高校ってほとんど男子校だろ？ 俺あつぐるしいの無理なんだよ。」

言った事に嘘は無かったが、一番の理由は帝都が公立だからだ。

公立は私立と比べて授業料とか、色々なことが安く済む。でも

そんな事、口が裂けても言えない。

「でも・・・」

母さんはまだ納得していない様子だった。

「大丈夫だって！！」

俺は怒鳴ってキツチンを飛び出た。

夜ご飯を食べている時、俺と母さんの間に気まずい空気がただよっていた。その空気を打ち切ったのは母さんだった。

「さつきはごめんね」

母さんが弱々しくつぶやいた。

「俺も言い過ぎたよ、ごめん」

・・・翌日

「翼ー、早く起きなさい」

母さんは今にも裏返りそうな声で言った。

俺には父さんがいない。俺が小さな頃に交通事故で死んだらしい。父さんは野球をしていて甲子園にも出た事があり、俺はそんな父さ

んの影響で野球を始めていつしか父さんと同じ舞台に立ちたいと思うようになった。母さんはそんなどうしようもない野球馬鹿を応援してくれている。

「はい」

俺は一階下りてパンをかじり、ジヨギングに出かけた。

そして門を出ようとすると目の前の誰かとぶつかった。そこには俺と同じくらいの年の女の子が倒れていた。

「大丈夫？」

俺が声をかけるとその女の子が

「大丈夫です」

と言つて軽くおじぎをした。その顔は少し子供っぽくてとても可愛かった。

「あの、もしかして陽子さんの知り合い？」

女の子が聞いてきた。

「陽子？ああ俺の母さんだよ」

俺が言つとその女の子がびっくりした顔でこっちを見る。

「母さんの知り合い？呼んでこようか？」

「お、お願いします。」

俺は玄関のドアを開ける。

「母さんお客さん、あっ名前はなんて言つなの？」

俺は名前を聞いた。

「田崎です。」

「母さん田崎さんつて言う人が来てるよ。」

俺が大きな声で言つと母さんがこっちに来た

「あら、綾ちゃん久し振り、で、何？」

綾、かあ・・・あれ、何だろうこの感じ 今までには無いこの気持ち、もしかしてこれつて恋？ いや、それはない。だって一目見ただけで好きになるなんてドラマの中だけの話だ。

「翼？つ・ば・さ〜」

母さんの声で俺は我に返つた。そこにあの女の子はいなかった。

「あれ、さっきの人は？」

俺が聞くと母さんはあきれ顔で

「綾ちゃんなら帰ったわよ、翼大丈夫？さっきからずっとぼーっとしてたのよ」

と言った。

「だ、大丈夫だよ。じゃあランニングに行ってくるよ。」

俺は慌てて家を出る。ランニング中はずっとあの女の子のことを考えていた。帰って寝る時もずっと考えていてなかなか寝れなかった。

次の日の朝、俺はそのせいで寝不足で授業中、ずっと夢の世界の中だった。

「翼ー」

誰に起こされて現実の世界へと戻された。

目の前にいたのは俺の女房役の新藤だった。

新藤はリードが評価されていて、肩が強くパンチ力もあり俺同様にいくつかの高校から推薦が来ていた。

「翼は高校どうするんだ？」

「俺は帝都に行くけど」

俺が言うと新藤も母さん同様のリアクションをしていたが、理由は聞いてこなかった。

「お前はどうすんだ？お前にも推薦いくつか来てただろ。」

「うーん、俺はまだ考えてねえなあ・・・でもあかつき大橋には行ってみてえ気はあるよな」

・・・あかつき大橋、たしかあかつき大橋はあかつき大学の附属高校で、友沢がいる暁中もあかつき大の附属校だと聞いた事がある。あかつき大、高、中学校は野球の名門で附属橋は甲子園の春、夏と連覇していた。

「翼、聞いているか？でもお前が帝都なら俺も帝都、考えておくよ」

「まじかよ。またお前とバッテリーが組めるかもしんねえのかよ！」

お前と俺だったらマジで甲子園行けるかもしんねえな!!」
俺は嬉しくてつい大声を出してしまった。

「お前はあげさなんだよ。」

と新藤が照れくさそうに言うと教室から出て行った。

2話：入学、そして再び

俺はスポーツ推薦で形だけの試験を受けて難なく合格した。新藤は一般入試からだったが、無事受かった。新藤に聞いて初めて知ったのだが、帝都高校は県下でも有名な進学校で、入学倍率はすごく高かったらしい。それでも首席で合格したんだからあいつは大したもんだ。

入学式の日

「翼、早く起きなさい、遅刻するわよ」

時計を見ると8時5分だった。

「やっぱい、まじで遅刻する。」

俺はあわてて制服を着た。鏡に映る自分を見ると自分に見とれしてしまう。改めて思うが俺はカッコいい方だと思う。身長は1

75cmをこえているし、目はキリッとしていて・・・

「翼！あんた・・・、何自分に見とれてるのよ」

気付くと母さんがいた。なんだか羞恥心がこみ上げてきて自分でも顔が赤くなるのが分かった。

「じゃあ行ってくる！」

俺は少し強く言った。

「いつてらっしゃい、学校でも自分に見とれないのよ」

母さんが笑いながら言った。俺はまた顔を赤くしながら

「うるさい！！」

と言つて帝都高校へと向かった。家から帝都高は歩いて15分

くらいで、ジヨギングにはもってこいの距離だった。学校に着くと急いで教室に向かった。廊下を走っていると誰かが飛び出してきた。(俺が飛び出したって言う方が当たってるかな) どんっ!

そこには倒れているあの時の女の子がいた。

俺は急いで謝った。するとその女の子が

「あ、あの時の人!」

と言った。正直嬉しかった。俺の事覚えててくれたんだ。

「あの〜名前なんていうんですか?」

「へっ?」

思わぬ言葉に声が裏返ってしまった。

「俺の名前? 翼だよ、白鳥 翼」

「翼さん・・・」

「翼でいいよ」

その女の子は改めて見てもかわいかった。

「翼さ、あ、翼?大丈夫ですか?私もうっかりしていて・・・」

「大丈夫だよ、あとため口でいいから」

すると女の子は困った様な顔をした。

「そうですか」

また敬語使った

「だからため口でいいってば!!」

「ご、ごめん」

女の子は今にも泣きそうだった。

「ごめん、言い過ぎた。」

二人の間に気まずい空気がただよった。

やっばい!この空気、どうにかしなきゃ

「ねえ」

「あの〜」

二つ言葉が重なった。

「先にどうぞ」

と言われたが俺も譲る。

「いやあ君から」

すると女の子が

「翼さ、翼は何やってるの？」

と言った。

「俺は野球やってたけど、知らない？ 中学時代は結構有名だったんだけどなあ」

やべえ、いらぬ事言っちゃった。

「へえ〜、で、翼は何？」

「あつ名前なんていうの？」

俺が聞くと女の子は慌てて

「ごめん名前、言っただけじゃなかったっけ？ 田崎 綾って言うの。よろしく 翼は何組？」

と聞いてきた。

「俺は7組だけど」

と言うと田崎は驚いたような顔をする。

「えっ本当？ 私も7組だよ」

俺もびつくりした。

「まじで？ スゲーじゃん」

時計を見ると8時23分だった。 帝都のホームルームは25分からだからあと2分しかない。

「やばい早く行かないと遅刻するぞ！！」

俺は田崎の手を取り、教室に走った。

その手はとっても小さくて、でもとってもとっても暖かくて・・・

ガラガラ・・・

教室に入ると新藤がいた。

「お〜翼 彼女か？」

「ちっちげーよ」

俺は顔を赤くしながらも反論した。

田崎の方を見ると俺と同じ

く顔を赤くしていた。

「つてか新藤と同じクラスかよ〜マジ嬉しいよ」

「俺もだよ、翼」

俺は席についた。横を見るとそこには田崎がいた。

「何でここに田崎がいるんだよ」

すると田崎がこつちをにらんで

「私に聞いても分からないよ〜」

と言った。田崎はまだ顔が赤かった。

「お前ら本当に付き合ってねえのかよ」

新藤が割り込んだ。

「付き合ってない!!」

俺と田崎が口をそろえて言った。

次の日、新藤と部活を見に行った。帝都は変わっていて入学した
らすぐに部活を決めなければいけなかった。

そこにはすでに入学希望者がいて、その視線の先にはノックをして
いる部活生の姿があった。

黒土のグラウンドは綺麗に整備しており、選手たちの動きにも無駄
がなかった。さすが強豪ってところか・・・
そこにジャージ姿の若手の先生がきた。

「お！一年は集まってるな？ 私は顧問の藤元だ。 新入生諸君に
は早速だが、実力を見せてもらう。各自アップをしておくように、
以上」

俺は新藤とアップを済ませ、他の一年がポジションごとに並んでい
た列に並んだ。ピッチャー候補は俺を含めて3人だった。

最初に投げる事になったのは山中という男だった。山中とは同じ
クラスで、中学生時代の自慢話を大きな声で話していたのを覚えて
いる。山中は変に格好付けながらマウンドを踏みならずと、よう
やく第一球目を投げた。豪快なオーバーハンドだった。山中が

投げた球はキャッチャーミットにはおさまらず、ワンバウンドしてフェンスにぶつかった。それから何球か投げたが、同じような感じだったため藤元がもういい、と言った。それから「明日からは野手の練習に加わるように」と続けた。山中は納得いかないような顔をしたが、素直に従った。

次に投げたのは田嶋という男で、無駄のないフォームから正確にミットにボールをおさめた。その後も確実にコースを狙って投げていた。いつか、こいつとエース争いになりそうだな。

そして俺の番。マウンドに上がると一度深呼吸をし、気持ちを落ち着かせた。

俺は大きく振りかぶり軸足にたつぷりと重心を乗せ、少し“間”を開け腕を振り下ろした。

スパーンッ

俺が投げた球は一瞬でミットに入った。

周囲がどよめいた。

よし、以外と緊張していない。二球目は少しスピードを付けてみた。

うん。さつきより納得のいく球がミットに決まった。

「変化球はあるか？」

顧問の藤元は満足したような顔で言った。

俺はうなずいて、スライダー、スローカーブ、そして覚えたてのフオークを交互に投げた。

最後のカーブは落差が大きすぎて3年のキャッチャーでも取り損ねる程だった。そして最後は思いつきり今の俺の最高の球を放った。

スパーン

ボールがミットに入る心地良い音と共に、ドスンというキャッチャーが尻もちをつく音もした。そのキャッチャーは信じられない、といった顔で足元に転がっている球をまじまじと見ている。

どうだ、これが俺の球だ

少しの間注目のまなざしを浴び、俺はそれに便乗して藤元にひどくお叱りを受けた。

3話・告白

それから1ヶ月たったある日・・・
学校のグラウンドでは梅の花が咲き始めている。

「白鳥、部活はどうだ。」

監督が聞いてきた。

「はい、だいぶん慣れました。」

「今度練習試合があるんだが、お前と新藤は先発で行うと思ってる。」

「マ、マジっすか」

俺は嬉しすぎて声が裏返ってしまった。

「で、どうだ？」

「もちろんです。練習試合っていつあるんですか？」

俺が聞くと監督がどこからか手帳を出してスケジュールを確認した。

「今度の土曜だ。」

「分かりました。」

そして家に帰ってこの事を話した。

「本当？良かったじゃない」

と言つてきつそうに咳をした。

「母さん大丈夫？病院行った方がいいんじゃない？」

「そうね、今度行こうかしら」

あつそうだ、綾にも言おう。

ここ最近、綾の事が頭の中から離れず思う度、胸がズキズキと痛くなる。もしかするとこれは、恋愛・・・感、情？ そうなのかな、きつとそうなんだろう。いや、絶対そうだ！ よし、電話で練習試合に出るといふ報告とともに今度デートなんてどう？って誘ってみるのも手かもしれない。

「翼、なあににやにやしてるの？気持ち悪いわよ。あつもしかして変なこと考えてた？ あら、翼もそんな年頃なのね。」

母さんは妙ににやけながら、腰を変にくねらせる。

「バ、馬鹿！ちげえよ。第一俺、母さんを犯す程飢えてねえから」「あら、誰も母さんのことを考えた？なんて聞いてないんだけどなあ。もしかして本当に・・・」

「うるさいうるさい、うるさい！考えてないってば！それより今から綾に電話するから少し黙ってて！！」

俺は無理やり母さんの言葉をさえぎると自分の口到人差し指を当て、シーツのポーズをした。

母さんは最近流行ってる歌を口ずさみながら自分の部屋へと戻っていった。

くく・・・

綾「もしもし翼？」

綾は弾んだ声で言った。

俺「うん、話があるんだけど」

綾「ほんと？私も話たい事があったの」

綾からの話？何だろう

俺「なんだよ」

綾「翼から言って」

俺「分かった。俺、今度の練習試合先発で出る事になった」

綾「本当？良かったじゃん 私も見に行つていい？」

綾の声のトーンが1オクターブ上がる。

俺「いいよ、大歓迎。で、綾のようは？」

やった、綾見に来てくれるんだ。嬉しいな

綾「えっ あのね私、なんかね・・・」

俺「なんだよ！」

綾「翼の事が『好き』みたいなんだあ」

ドクッ

俺「え？」

綾「だめ、かな」

綾の声が少し暗くなる。

俺「だめ・・・じゃない」

綾「それって・・・」

俺「つまり俺と綾が付き合う」

綾「本当？」

綾の声が一気に明るくなる。

俺「嘘ついてどうすんだよ」

綾「嬉しい、翼の事大好き!!!」

俺「分かった綾、俺も大好きだから。じゃあまた明日」ピッ

俺はそれから1時間くらい携帯を握りしめたままずっとドキドキしていた。落ち着けえ俺。あまりにも突然の告白に俺の情報処

置能力は著しく低下していた。落ち着け、落ち着け

俺は自分にそう言い聞かせて今起きていることをまとめた。

俺には好きな人がいてそれは綾で、デートしようって冗談を考えな

がら綾に電話したら告られて・・・綾に告白されて・・・

つまり綾は俺のことが好きで、俺も綾のことが好きでそれはつまり

俺と綾は好き同士で・・・両想いで・・・付き合うことになって・・・

・付き合うことになって・・・？付き合うことに・・・なって?!

す、すげえ。。。人を好きになるなんて初めてだし、お付き合

いなんて本当にドラマの中だけの話だと思っただけ。でも今こう

して俺の綾は付き合うことになった。

嬉しい？

嬉しい!

初恋は実らないって怪しい雑誌に載っていたのだけれどそんなの嘘
つばちだ。だって現に初恋が実ったのだから。

4話：変わった転校生

次の日

俺は学校へと向う途中で綾と出会った。

「おはよ……」

「……はよう」

・
・
・

なんでこんな気まずい空気になるんだよお

「行こうぜ」

俺は綾の手を握った。

「付き合ってたんだから手ぐくらい握ろうぜ」

「翼」

綾は泣きそうになりながら抱きついてきた。

「なんでお前が泣くんだよ」

「だって嬉しいんだもん」

綾は笑いながら言った。 そんな綾の髪をなでた。 そして綾のほっぺにキスをした。

学校について新藤に付き合った事を言った。

「まじ？おめでとう。 まあこうなる事は分かっていたけどな。」

新藤が笑いながら言った。

この話を聞いていた女子が数人悲しんでいて中には泣きだす子もいた。 俺ってこんなにもててたんだあ なんて思ったりして

「翼、大丈夫？」

綾が心配しながら聞いてきた。

「大丈夫だよ。 ぼーっとするのは癖みたいなものだから」

「そーお？」

「で、お前部活はどうすんだよ？」
俺は話をそらした。

「私は野球部のマネージャーやるつもりだよ」
と綾が言った。むっちやくちや嬉しい

「マジかよ！じゃあこれから部活でミスできないじゃねえかよ！！」
「嬉しくないの？」

綾が少し膨れて言った。

「いや、嬉しいよ！」

と言うと綾が照れくさそうに

「ありがとう」

とつぶやいた。

「あのね、うちのお父さん野球選手なんだけど知らない？ 田崎
敬浩っていうんだけど」

俺はびっくりした。 田崎 敬浩っていったら日本球界を代表する大エースで俺の憧れだった。 そんなすごい選手の娘がこんな所にいるなんてびっくりした。

「もしもし、翼くん？」

綾の声で我に返った。

「大丈夫？つてぼくとするのは翼の癖か。」

「すげ〜よお前の父さん 敬浩選手は俺の憧れで小さい頃はよく敬浩選手のフォームをまねしてたなあ」

「へえ〜、じゃあ今度家来ればいいじゃん今お父さんいるから」

綾は、少しふてくされたように言った。

「は〜ん、父さんにやきもちやいてんだ〜」

「綾、お前父さんにやいてんのか？」

俺が聞くと

「ち、ちがうよ！」

と、怒って言った。

「はい、授業始めるぞ〜」

タイミング良く先生が言った。 ありがとう先生。

授業

が終わると部活に向かった。もちろん綾と一緒に 部室に入ると監督に綾を紹介した。 うちには今、マネージャーがいないからすぐにOKを出してくれた。

『良かったな、綾』 俺は心の中でそう言った。俺はマウンドの方を見るとそこには知らない人がいた。 多分それはシンドウという人で、新藤曰くすごい変わり者、だそうだ。 そのピッチングを見ると鳥肌が立ってきた。

手元で若干曲がるストレート、同じ速度で落ちるフォークなどプロ級、いやそれ以上のピッチングをしていた。 むこうがこっちに気付いた様で近づいてきた。

「やあ、君は・・・」

そいつは先輩すらさえしてた。

「白鳥 翼」

俺がそっけなくいうとそいつはは閃いたような顔をした。

俺の事を知ってるのか？

「あ、そうだ。白鳥だ！俺、神童《しんどう》守。 神様の神に童話の童。 この前、帝都高校に転校してきた“期待のルーキー”って奴かな？」

『神童』かあ、珍しい名前だなあ（まあ白鳥っていうのもなかなかいんだけどね・・・）

それにしても自分の事を“期待のルーキー”だなんてほんと変わってんなあ

「神童・・・」

すると神童は顔をしかめて

「守でいいよ」

と言った。

「じゃあ守」

「まあいつか。で、何か用？」

守が聞いてきた。

「いや、別に」

「ふうんそういえば翼くんはピッチャーだったよな？ 投げてみるか？」

そいつはまだ先輩ずらしていた。

「ねえ年、同じなんだけど」

俺がそういうと守は笑顔で

「知ってる。 だって龍也に聞いたもん」

と言った。 龍也というのは新藤の下の名前だ。

新藤の事を下の名前で呼ぶ人を見たのは新藤の親以外、初めてだった。

でも、同級生と分かってああいう口のきき方をするってことは、もともとそういう喋り方なのか、それとも俺の事を下に見ているのか。

・

「ねえ、どうするの？」

守がせかす。

「分かった。 投げるよ」

同じ投手なんだし、ここで一発ガツンと行かなきゃ多分これからも舐められっぱなしになるだろう。 そんなの嫌だ。

俺はマウンドに行き、肩を慣らして集中力を高めていった。 俺は大きく振りかぶって白球を力いっぱい投げた。 そのボールはミットとは大きくはずれ、ネットに当たった。

「す、すまん、力んだ。」

と言って守の方を見ると目が点になっていた。

「スゲーよお前、もう一回投げてみる」

守が興奮ぎみに言った。 俺は集中し直して、白球を力いっぱい投げた。

スパーン

ボールがミットに入る心地良い音がした。

「やっぱりスゲーよお前」

何がすごいのかなあ、普通に投げているだけのに

「お前のストレート、『ジャイロボール』だよ」

ジャイロボール？何だそれ

「あの、ジャイロボールって何？」

俺は聞いてみた。

「ジャイロボールっていうのはボールの回転軸が打者に向かって進み、打者の手で伸びる幻のストリートだよ」

え？俺ってそんなすごい球投げてたんだ・・・

「お前マジスゲーよ。俺の存在、危ないかもしれない！俺もムービングファストの完成度を高めないと」

守はそう言っでどこかに走っていった。

うしろを見ると監督が走ってきた。

「白鳥、お前の母さんが癌だつて」

「えっ、母さんが、癌？朝まで元気・・・」

そういえば確かに最近の母さんはきつそうだった。

「しかも末期だそうだ。」

末期・・・ってことはかなり前から癌になってたのか

「母さんは今 病院にいる。行ってやれ」

俺は監督にお礼を言っで病院へ急いだ。

母さんのいる病室に入った。そこにはまだ元気そうな母さんの姿があつた。でもなぜか涙が込み上げてきた。

「母さんごめん、俺が親不孝だったから。でも最後にちゃんと話した内容が下ネタなんてやだよ」

すると母さんは弱々しく笑った。

「先生？母さんは治りますよね。ってか絶対治して下さいよ！」

先生は困った様な顔をした。

「お母さんの病気が治る確率は低いよ。正直奇跡が起こる事を願うだけだよ」

先生の言葉を聞くと生きている気がしなかった。次の日、俺は学校を休んだ。すると綾から電話がかかってきた。

綾「大丈夫？」

俺「ああ、大丈夫だ」

ため息が出るような声だった。

綾「どうしたの？翼、変だよ」

俺「そうか？」

綾「明日は学校、来るよね？」

俺「分かんない」

綾「本当に大丈夫？何かあったなら相談にのるよ」

俺「実は、俺の母さん癌なんだ。しかも末期で治る確率が少ないらしい」

・
・
・

二人の間に変な空気が流れた。

綾「大丈夫だよ、絶対治るって」

俺「ありがとう、また明日な」

綾「うん、じゃあね」

綾から電話がかかってきて何だか勇気が出た様な気がした。

次の日、俺は学校に行った。そこで綾と会ったので昨日のことでお礼を言った。

「良かった〜いつもの翼に戻った〜」

綾が泣きながら抱きついてきた。

「そういえば練習試合、明日じゃない？」

綾が言った。俺は母さんの事で頭がいっぱいで試合の事、忘れてた！

「そうだ！明日だ」

「忘れてたのか？」

新藤が聞いてきた。

「まあいいんじゃない」

理由を知っている綾がフォローしてくれた。

そして土曜日

「よし、行くか」

俺は高鳴る鼓動を抑えグラウンドへ向かった。

その途中で綾と会った。

「今日は頑張つてね、はいこれ」

綾が渡したのは『必勝祈願』と書いてあるお守りだった。

「ありがとう」

俺はそう言つて綾にキスをした。

「絶対勝つからな！」

「うん、頑張つてね」

そして試合会場に着いた。そこでスタメンが発表された。俺は6番、ピッチャーで新藤は5番だった。

「よし、行くか」

俺はマウンドへと走った。

マウンドをならしてロジンバックを手に取り集中力を高めていった。

何度か深呼吸をし、大きく振りかぶつて白球をできるかぎりの力で投げた。

5話・母さん

土曜日の練習試合から1週間、あの試合を思い出すと今でも笑みがこぼれてくる。

6回を2安打、12奪三振だった。バテイングでは3打数1安打1打点と、こちらも好調。新藤は4打数3安打1本塁打でこの試合の監督賞だった。そんな事を考えていると監督が慌てた感じで走って来た。

「白鳥、母さんが亡くなっただって病院から電話が」

・・・えっ？　俺は一瞬状況が飲み込めなかった。　母さんが・

・・・『死んだ』？　嘘・・・　ありえない　嘘だ　嘘だ　嘘だ

「監督、嘘ですよ」

俺は恐る恐る聞いた。『嘘だよ』と笑いながら言っただけだった。でも答えはNOだった。

俺は泣けなかった。　っていつか信じきれなかった。　走って病院に行った。　だかそこには母さんの姿は無く、病院の先生に聞くと母さんは通夜の会場に運ばれたらしい。

その時母さんは『死んだ』と言う実感がわいてきて、じわーっと涙がでてきた。　家に帰って泣きじゃくれた。　目がカラカラになるまで泣いた。　そして綾に電話をした。

綾「もしもし？」

俺「俺だ」

綾「翼？何？」

俺「別れよう」

綾「なんで・・・」

俺は電話を切った。　今から俺はどうやって生きていけばいいんだろう・・・　リビングに入ると母さんの携帯があった。　それを開くと未送信メールがあった。

「翼へ」

翼がこのメールを読んでいる頃には私は死んでいる頃だと思えます。多分翼はこれからどうやって生きるのだろう、なんて考えていると思います。翼はお婆ちゃんの所に行く様子を話をつけています。台所の棚の中に封筒があります。その中には昔から少しずつ貯めてきたお金があります。少ないですが、どうか頑張ってください。あと綾ちゃんとはこれからも仲良く付き合ってくださいね

母より
『

「母さん・・・」

俺はまた泣いた。泣きじゃくれた。

母さんは俺にとって唯一の親であり、家族と呼べる存在だった。

いつでも俺を応援してくれて、たまには本気でぶつかったこともあるけど、次の日の朝には何事もなかったかのように振舞ってくれた母さん。父さんがいない事をいじめられて悩んでいた時には慰めてくれた母さん、一番つらかったのは母さんのはずなのに・・・

俺はそんな母さんが好きだった。いや、好きだ。そしてこの気持ちは一生涯変わらない、変えられない。

俺は母さんが、母さんの事が・・・大好きだ！

6話：綾の決心

次の日の朝、俺はばあちゃんの家に向かった。

ばあちゃんの家は帝都高校の近くの団地に住んでいる。

最近は雨の日が多くなってきた。まあ梅雨なのだから仕方がないところはあるけど、雨の日は室内で筋トレばっかだから正直つまらない。

ばあちゃん家で生活を始めて3週間、俺はランニングに出かけようとした時、目の前に綾がいた。俺はびっくりしたが綾の方がびっくりしていた。

「おう」

俺は声をふりしぼった。案の定、二人の間には気まずい空気が流れた。

「あのな」

「あのね」

二人の声が重なった。俺は笑った。綾も笑った。

「で、何？」

綾が聞いてきた。いつもなら先に言わせるが今回は大事な話なので俺が先に言う。

「あのな、俺の母さん・・・癌で死んだ。これからどうやって生きていくか分からなかった。だから別れようって言ったんだ。

でも綾と会わなくなっただけから綾の大事さが分かった。やっぱり俺には綾がいないとダメだ。また付き合ってくれ！」

言った気持ちに？はない。俺はばあちゃん家に住むようになって毎日を言っただけでいいほど綾のことを考えてた。思う気持ちが強すぎて、綾が夢に出てくる日も少なくなかった。そして綾はうなずいた。

「私も大好き!!」

綾が飛びついて来た。俺は優しく受け止めた。この光景を見ていたばあちゃんはやかにやしていた。俺はばあちゃんを睨むと外に出て、団地の中にある公園の椅子に座った。すると綾が何かを思い出した様に顔を上げた。

どうしたんだろう

「明日、うちに来る？」

俺はびっくりして飲んでいたコーヒーを嘔き出しそうになった。

「マジで？」

綾はうなずいた。

「すつげえ嬉しい」

俺は家に帰ると、さっそくあるだけの服を引っ張りだして一人でファッションショーをした。

2時間後、ようやく決まった服を横に置いて寝る準備をした。

そして布団の中に入って目をつぶった。

目を開けると死んだはずの母さんが立っていた。

『母さん？』

母さんは笑ったまま何も言わなかった。

『母さん、俺だよ！翼だよ！！』

母さんはどんだん離れていった。

「母さん」

俺は大きな声で言った。

「翼？翼ー！」

誰かの声で現実の世界へと戻った。前にいたのは母さん、ではなく綾だった。

「綾？母さんは？」

綾はびっくりした顔で

「翼のお母さんは、もう・・・」

と言った。そうかあれは夢だったのか、ってかなんで綾がこんな所にいるんだよ、俺スゲーはずいじゃねえかよ！

「なんで綾がここにいるんだよ」

俺は聞いてみた。すると綾は

「だってうちもこの団地だもーん」

となぜか得意げに言った。俺はびっくりして布団から飛び出た。

綾と俺が近所？考えてもみなかった。

俺は急いで着替えて綾の家に行った。

「おじゃましまーす」

小さな声で呟いた。

「誰もいないよ」

つてことは俺と綾の二人だけ？俺はなんだか緊張してきた。

綾は慣れた手つきで紅茶を入れ始めた。

「あのね、私ね・・・」

「なんだよ」

「うち、東京行こうと思ってるんだ・・・」

・・・え？ 東京？

「スカウトされたんだ。行っていい？」

「それはお前が決めるよ」

本当は行ってほしくなかったが自分の将来は自分で決めるのが一番だと思った。

「じゃあ私、東京にいくね」

綾は震える声で言った。俺は何も言わなかった。何も言えな

かった。大切な人がまたどこか遠くに行ってしまう。そう考え

ると涙が出てきた。

「で、いつ行くんだよ。」

俺は出てくる涙を抑えて聞いてみた。

「7月23日だよ。」

7月23日・・・

一週間後だ。

「私東京に出て絶対売れる！ だから翼は甲子園に出てほしい。

これは約束。 いい？」

綾は涙を流しながら言った。

「おう！まかせとけ。俺、絶対甲子園行くからな！」

俺は綾と甲子園に行くという約束をした。そして二人は愛し合
い、初めて一つになった。

7話・夏、始まる

蝉がうるさい程に鳴き、夏が来たと再確認する。
あれから俺は野球づけの毎日を送っていた。甲子園に出る、という綾との約束を守るために・・・

そして夏の県大会一回戦

あれから一年、俺はかなり成長した。身長は7?も伸びて速球は140?後半にまでなった。変化球はスライダー、フォーク、スローカーブに加えて現代の魔球、ナックルを覚えた。
背番号「1」をもらい、この試合も先発で出ることになっている。
「よし、行くか」

俺はマウンドへ向かった。そして大きく振りかぶり第一球目を投げた。白球はミットの中に入り、それと同時に心地良い音がした。

観客がどよめいている。どうしたんだろう。

俺はそんなことを思いながら二球目を投げた。

また観客がどよめいた。それから俺は試合に集中した。

試合を終えてみると9回を3安打10奪三振で完封勝利をおさめた。
観客がどよめいた理由がスコアブックを見て分かった。1球目は144?で2球目は146?出ていたからだ。だけどこの日の最高速度は148?だったらしい。

二回戦の相手は成京高校という優勝候補の1チームだった。俺は4点を取られながらも打線が奮闘し4-4で延長戦へともちこんだ。
俺は10回にも1点を取られ、この回で点を取れなければ負けになる。1アウト1、2塁で俺に打順が回ってきた。俺は打席に入って集中力を高めていった。そして相手の投手が投げた球を思

いつ切り振った。

「ストラ〜イク」

心を落ち着かせてバットを構えた。二球目は高めの甘いコースにきたのでバットを振りぬいた。俺の打った打球はライトスタンドへと消えていった。

サヨナラ・・・

俺は嬉しくて、嬉しすぎてベンチに帰ると仲間達と抱き合っつて新藤とハイタッチをした。

三回戦の相手は栄光学園という四番の川村を軸とした攻撃重視のチームだった。しかし波に乗っている俺は17奪三振で完全試合を達成した。しかもMAX150?と一年生記録を打ち出したのでマスコミが騒がしかった。俺達は順調に決勝までたどりついた。

決勝の相手は優勝候補筆頭、王者のあかつき大橋だった。あと一つ勝てば甲子園だ。この試合、負けられない。

そして試合が始まった。

あかつき大橋の先発は背番号「10」の友沢だった。

「ウ〜〜〜〜」

試合が始まるサイレンが鳴った。友沢はサイドスローで変則フォームから出てくる140?の速球は右打者からすると内にえぐりこんでくるように見えて、なかなか打てるようなしるものではないし、スライダーはプロでも通用する程速くてキレもある。そんな友沢と俺の始めの対戦は2回、1アウトで俺に打順が回ってきた。

俺は一球見逃してストライク、

2球目はストレートをなんとかバットに当ててファール。

追い込まれての3球目、ストレートを意識しすぎて遅めのカーブにタイミングを外されて空振り三振。

その裏、俺はヒットとエラーでワンナウトランナー1、3塁とピンチを招いたが、次の打者を4-6-3のダブルプレーでなんとか抑えた。

その後試合は動かず、0-0のまま9回の攻撃に差し掛かった。

ワンアウトランナーなしという場面で俺に打順が回って来た。一球、二球と空振りした俺は一度打席を外した。頭の中には綾の事があった。綾は今では売れっ子アイドルとなっている。綾は約束を守った。次は俺の番だ！

俺は覚悟を決め、打席に着いた。少し足場を慣らし、次に来る球を考えた。

思えば俺と友沢は小学生の頃からライバルだった。友沢のお母さんは重い病気に罹ってて、高い医療費を払うためにいくつものバイトを掛け持ちながら野球の練習もしているのだからすごい。俺と友沢は今までよく比べられてきたけど、努力の数では圧倒的に負けている。それでも俺だって人一倍努力はしてきたつもりだし、この勝負にも負けるつもりはない。俺は少なからず友沢のことを意識しているし、友沢もしていると思う。だから3球勝負、俺はそう考え友沢の得意なスライダーで勝負に出ると読んだ。友沢は足を上げ、3球目を投げた。

ッ！

スライダーを待っていた俺に対して友沢はインコースにチェンジアップを投げてきた。タイミングを完全に外された俺のバットは空をきった。

「ストラック、ッタ アウト！」

主審は独特なイントネーションで俺の三振を告げた。

新藤が友沢からホームランを打って先制したが、後続が波に乗れず、一点止まりとなった。

9回裏、俺はツーアウトまでは簡単に取ったがヒットを二本立て続けに打たれ、あげくには何でもない送りバントをエラーし満塁となった。

7・5話：『特番 アイドルの素顔を暴露しちゃうよ スペシャル』

「さあ始まりました。『特番 アイドルの素顔を暴露しちゃうよ スペシャル』今夜、この番組の餌食になるのは 彗星のごとく現れた清纯派アイドル、田崎綾ちゃんです」

テレビではすっかりおなじみとなった司会者に紹介された綾は黄色い声援を浴びながら、ステージへと向かった。

「こんにちは」

綾がそう言うのと観客席から笑いが起こった。

「綾ちゃん、この番組が放送されるのは夜なんだから挨拶はこんばんは、でしょ」

「あ、そうでした。すみません、まだ慣れてないもので・・・では改めて、こんばんは」

顔を赤らめながら訂正した。

「しっかりしてよお。じゃあこの番組のシステムを改めて説明するね。僕が綾ちゃんにいくつかの質問をします。綾ちゃんの答えを聞いてあそこにいらっしやる占い師のかたが綾ちゃんの本性を暴いちゃう、っていう感じですよ」

司会者に紹介された占い師は首から数珠を何列にも連ねていていかにもっていう感じだった。

「では早速質問タイム。第一問！ まずはお名前、生まれた生年月日、血液型を教えてください」

「結構本格的ですね え〜と、名前は田崎綾です。 1993年の5月16日生まれのア型です」

司会者は驚いたような顔をした。

「え〜、まだ17歳ですかあ。若いですね」

司会者のオーバリアクションに綾は笑みをこぼした。

「初恋は何時ですか？」

司会者の質問に観客はオーツと歓声をあげる。

「初恋、ですか？そうですねえ、去年の・・・秋、ですかねえ」

「へえ、結構最近ですね。あ、もし差し支えなければその方の事聞いちゃってもいいですか？」

観客からまた歓声があがった。

「はい、いいですよ。えっと、年は同じ年で高校の同級生です。

その人は野球をやってて、確か・・・今日も試合だったと思います」

「ほう、夏の甲子園をかけてですか？」

司会者は野球という言葉に興味をそそられたらしく、前のめりになりながら聞いた。

「ええ、今日は決勝戦だと聞いてます」

「聞いてる、というとその彼とはまだ連絡を取ってるんですか？」
司会者が聞くと綾は首を振った。

「いえ翼とはある約束をして、その約束を果たすまでは連絡はしないって私は決めたんです」

「あの、あつく語ってる場所すみませんが彼氏の名前、出てますけど」

司会者の言葉に綾はハツとして顔が赤くなっていた。

「あつ！いけない。ここカットでお願いします・・・」

綾は申し訳なさそうに言った。

「いや、使いますよ」。だってこの番組の趣旨はアイドルの素顔を暴露しちゃうおう、なんですから」

アハハ・・・

綾はその後、翼の試合の事で頭がいっぱいになった。

(試合、どうなったのかな。翼、絶対勝ってね)
心の中で強くそう祈った。

8話・夏、終わる

はあ、はあ それにしても暑い。今日は記録的猛暑だ、って天気予報で言っていた。いつもは当たらないくせにこんな時に限って当てんなよな、まったく。

俺は乱れた呼吸を整えてあたりを見渡した。すべての塁上にランナーがいる。

状況は至ってシンプル。九回の裏、あかつき大橋の攻撃でツーアウト満塁なのだ。

俺達がいる帝都高校が1-0でリードしているだけだから一打逆転っていったところか

こんな状態でも状況判断が出来ているのだから案外自分で思っているよりも冷静なのかもしれない。

打席には俺がライバル視している友沢。友沢の打者としての能力は知らないが、打たせる訳にはいかない。さっきのかりはここで返してやる。

俺は大きく振りかぶり、足を上げ少し“間”を開け一球目を投げた。
パス

俺が投げた球は不規則に揺れながらワンバウンドして新藤のミットに入った。

コースは完全にボールだったが、友沢がバットを出したのでストライクとなった。

二球目はスライダー。これにも友沢は手を出したがまたも空振り。なんだ、あのスイング。まるで素人じゃないか 友沢は打撃は苦手らしい。

新藤は一球外すように要求したが、俺は首を振った。すると新藤は首をかしげてマウンドに向かってきた。

「めずらしいな、翼が俺のサインに首をふるなんて」
新藤は不満そうだった。

「友沢のスイング見ただろ？ありや打撃は苦手だぜ」

俺はそう言うのと友沢の方を見た。友沢は何度もなにかを意識するようにスイングをしていた。

「でもよお、友沢はこの大会4割も打ってんだぜ？今日だってお前のストロークを軽々と打ち返してたし」

俺は新藤の言い方が気に食わなかった。

「なんだよ、お前は俺の球が信じられないっていつのか？」
むきになってた。

「いや、そうじゃないけど・・・」

新藤は困った顔をしていたが、主審に促されてよし、分かったと言った。

「球種はストローク、高めぎりぎり。いいな」

俺はうなずくとシッシと新藤に速く行くようにとジェスチャーした。

かっとなぜー ともざわ とーもざわ とーもざわ

アルプスの声援は一段と大きくなる。でもあかつき大橋は男子校だから応援の声は低く、なんだか奇妙だった。

友沢を見る。すると友沢が一瞬笑ったような気がした。

俺は大きく振りかぶり足を上げ、少し“間”を開け踏み込み、今出来るだけの力を込めて全神経を左手に集中させ白球を投げた。

俺の腕から放たれたボールはまるで生きているかのような軌道で新藤の構えるミットに収まる、はずだった。

カキーン

友沢は俺の懇親のストロークを打ち返し、打球は一二塁間を抜けてヒットとなった。

？、だろ？

それを確認した三墨手は悠々を生還する。

終わった・・・

俺はそこにただただ、立ち尽くすだけだった。

友沢はこっちを見ながら、目が合うとにやりとした。

やられた。友沢は俺の事なんてなんとも思ってたんだ。

ただの対戦相手・・・

俺は友沢の事をライバルだと思っていて、友沢も俺の事をライバル視していると思っていて。

でもそれは俺の勘違いで、自意識過剰で・・・

終わったんだ、二年の夏が。

9話：退学

「我が校は君を退学処分にする事を決定した。理由は・・・分かってるな」

夏は過ぎたというのにまだ未練があるらしく、9月に入っても暑い。

髪をきれいに7：3に分けた初老の校長はまるでだけだものを見るような“目”で俺を見た。

その目は3ヶ月前、初めて校長と話した時とは真反対の目をしていった。

人間という生き物は世間体というものを気にする。学校の校長という立場なら学校の評価を気にするのは当たり前だが、あの期待に膨らんだ校長の“目”を知っている俺にとってその「お前は学校の恥だ」という視線は苦痛の他なかった。

早く帰りたいのになかなか話は終わらない。

もうこの学校を退学するのだから後は好きにさせてくれ、と言いたかったが履歴書には《帝都高校中退》と書かなければいけないらしく、下手すれば今後の在り方にまで口出しされそうになった。いや、下手しなくても口出された。

「君はもう我が校にとって部外者なのだからその部外者が外でなにかやらかして学校の評判を落とさぬよう、くれぐれも気を付けて行動するように。分かったね？」

校長は二回目の部外者と評判という言葉を特に強調しながらそう締めくくった。

俺はこの窒息しそうな部屋を出ると、外の空気をめいいっぱい吸いこんだ。そうすると身体中に酸素が送り込まれたみたいで少し体が軽くなった、ような気がする。

学校を辞めさせられた訳、それは俺がちよつとした事件を起こしたせいだった。その事件の発端は二週間前、俺は今日も学校をさぼ

り街中をぶらぶらしていると誰かの肩にぶつかった。

あいにくぶつかった相手がいかにもって感じのヤンキーで謝る隙もなく、絡んできた。

「いてっ どこ見て歩いてんだてめえ」

ヤンキーは必要以上にがンを飛ばし、顔をすれすれまで近づけてきた。俺は病んでいて、どうかした。その後そのヤンキーと喧嘩をやるはめとなった。一応喧嘩には勝てたものの、近隣住民から通報があり警察に身柄を確保されてしまった。もちろんそのことは学校側に渡り、この事態になったという訳だった。

10話：みやび

10月、だんだん夏の面影もなくなってもうすっかり秋色に染まっている。

帝都高校を退学になって3週間。俺は何かをする訳でもなく街中を歩きまわり、訳もない喧嘩を繰り返していた。何度も警察にはお世話になったし、今だって例外ではない。

「白鳥、お前昔はすごいピッチャーだったんだろ？新聞に載ってたぜ。一年ながら155？のストレートを投げる本格派だった」

一時期俺は追っかけが出るくらいマスコミに注目されていた。でもそれはもう昔の事で、今では違う意味でマスコミに騒がれている。

「なんでお前が道を踏み外したのかは知らないが、このままこんな事を続けても何もない事はないぞ？」

そんなこと言われなくても分かってる、このままじゃいけない事なんて。

俺がこんな事になってしまった原因、それは綾の存在が大きかった。綾のいないこの世界がともつまらなくて、そんな世界を嫌になつて・・・

もちろん綾のせいにはしているんじゃない。それでも綾は俺にとってそんなかけがえのない存在だった。

俺の原動力と言っても過言ではなかった。でももう綾はいない。

このまま一生会えない訳じゃないけど東京に、それも芸能界でも上の方に行ってしまった綾は雲の上の存在だ。

「もうするんじゃないぞ。お前は強いから喧嘩した相手の手当てが大変だ」

俺はかれこれ二十回くらい喧嘩をしているが一度も負けていなかった。これはすごいらしい。

帰り道、俺は反省するでもなく街に繰り出す。

「ねえ、今からどっか行かない？」

知らない女が話しかけてくる。正直鬱陶しいけどその女はどっか綾に似ていた。

「いいけど」

俺はそっけなく答える。

「本当？嬉しい 僕みやびっていうの。よろしく」

みやびと名乗る女はニコっとした。笑った顔はますます綾に似ている。

「俺は翼」

「知ってる。新聞で読んだ。あんたすごいんだろ？でも最近
は聞かないなあ・・・なんで？」

なんでって・・・学校辞めたんだから新聞に載らなくて当たり前だ。

「あ、でもなんか3流雑誌に事件起こして学校を退学になったって書いてあったけど、あれ本当なの？」

「あ、ああ」

みやびは好奇心が前に出てどんどん俺に質問してくる。

「何で？何で辞めさせられたの??」

う、うう

この女、人の傷口ばかり触ってくる。

「なんだっていいだろ？」

俺はつい大声を出してしまう。

「別にいいよ」

みやびはプイっとそっぽを向いて言う。

「ただ・・・お前の為になれば、って思ったただけだから
お前の為って、俺の為？」

「何で出会ったばっかの俺なんかにかまってんだよ。彼氏の相手
しなくていいのかよ」

「彼氏なんかいないよ。ってか彼氏いたらナンパなんてしないだ
ろ」

あ、俺悪い事言ったかな。

「わりい、みやび可愛いから彼氏いるかと思った。でもほんと何で俺なんかにかまってんだ？」

「だって・・・タイプなんだもん。翼の事・・・」

みやびは顔を赤くして、そわそわしながら言った。

タ、タ、タ、タイプ????????????????

「え、だって、え？」

やばい 俺まで赤くなってきた。

「だめ、かな？」

みやびが上目づかいで聞いてくる。

Winner みやび

俺はみやびの上目づかいについて目をそらしてしまった。 あんな純粹な顔、直視できない。

「いいよ」

するとみやびはニコツとして、目から雫を落とした。

「お、お前泣くか笑うかはっきりしろよ」

みやびの目からはどんどん涙が出てくる。 泣いたせいで化粧が

取れたけど、すっぴんのみやびも可愛かった。

「らって、うれひいんらもくん」

みやびは泣きすぎてろれつが回っていない。

その後話を聞くと、新聞に載ってた俺に告白するのはものすごく勇氣が必要だったらしい。

で、結果を聞いた瞬間にその緊張から一気に解放されて感情をコントロールできなくなったらしい。

それから俺とみやびはいつの間にか日の暮れた街へと繰り出した。

11話：新たな学校

俺は新たな期待と不安の両方を持ちつつ、学校の門に立っている。よ、とみやびに背中を叩かれ、学校の中に入る。

「なあに突っ立ってんだよつとお」

みやびも門を越え、学校に入る。

涼宮学園高校

俺が住んでる隣の区にある私立共学の高校。創立15年と新しいながら、部活にかなり力を入れていてサッカー部は去年の県大会で準優勝している。学力もそこそ良く、文武両道のさわやかな学校だ。

実際、これまでに会ったこの生徒はみんな顔が生き生きしている。

「翼、大丈夫か？　ポーっとしてたぞ？」

みやびは心配そうに顔をのぞかせてくる。

「大丈夫だよ。　ぼーっしてるの、癖みたいなものだから」

俺がそう言うともみやびはニコっとして

「なら大丈夫だな」と言う。

みやびは制服姿の俺をまじまじと見ている。

「なに見てんだよ、はずいじゃねえか」

俺は自分で顔が赤くなるのが分かり、そっぽを向く。

「彼氏の事見て何が悪いんだよ、それに・・・制服似合ってるよ」

みやびは自分の言ってる事の重大性にきずいたのか、顔を赤らめ、

校舎の方へ走る。

白い地面を踏みしめて、かじかんだ手にふうーと息を吹きかける。

「何やってんだ、早く行くぞ！」

みやびはずっと遠くの方で俺が来るのを待っている。

俺は急いでみやびのところに向って走っていく。

「はあ、到着。みやび、俺今日校長に呼ばれてるから行ってくるわ」

みやびはえくっという顔をしたけど何も言わず、校長室まで案内してくれた。

「案内ありがとう」

俺はみやびにお礼のキスをして、校長室に入る。

――がらがら……

「失礼します……」

校長室にはガラス製の机を挟み、革張りの2人掛けのソファが並んでいる。

「ええと、私の記憶が正しければ君は白鳥君かい？」

この校長、オーラが半端ない。机越しでも感じる。

「はい、そうです。これからお世話になります」

俺は頭を下げた。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。私は涼宮学園の校長、東堂
広行だ。よろしく」

東堂、広行……どこかで聞いた事がある名前だ。気のせいだろうか？

「確か君は帝都高校では野球部だったよね？この学校ではやらないのかい？」

野球……夏の予選以来白球も手にしていない。

「今はまだ考えてません」

「そうか、うちの野球部は弱くはない。どちらかと言われれば強い、しかも今年は打者にいいのがそろったからあとは君が野球部に

入ってくれば、と思ったのだけど・・・ まあそれは自分で決める事だ。 私がどうこう言うことではない」

この言葉を聞いた瞬間、確信した。 この人は信用してもいい俺の直感はその言うている。

「考えておきます」

俺はその時決心した。 昔の自分を取り戻すと。 そしてそれを越えてやる！

「どうやら時間らしい。 お迎えが来ているよ」
外を見るとみやびが廊下で待っている。

「あの子とは仲良くしてやってくれ」

俺は曖昧にうなずく。

「そうか、じゃあ行っていいぞ」

俺は校長室を出た。

「翼、なんの話をしてたの？」

みやびが腕に抱きついて聞いてきた。

みやびの話、なんだけど本人には言っではいけないような気がした。なんとなくだけど・・・

「ひみつ？ それより俺何組だ？」

みやびは少し考えるポーズをした。

「え〜と確か翼は2組だったと思うよ？」

その答えはあまりにも不確かだったから校長に聞きに行った。

「4組だって」

俺がそう言うともみやびはてへへ、と照れるポーズをした。

「って4組?! それなら僕と一緒にじゃん」

みやびと一緒に、良かった。

「じゃあ、行こ？」

みやびは手を差し伸べている。俺はその手につかまり、新たな友達がいる教室へと向かった。

12話・ぼっや

がらがらから・・・

「すみません、遅れました」

みやびは教室に入り、担任に向かってペコっとして手招きをした。先生は首をかしげたが、みやびの下手なジェスチャーで事を気付いたのかこちらへ向かってくる。

「君が白鳥 翼君ね？ 良かった。私があたなの担任の嶋谷 朋美よ、よろしく。時間になっても来なかったから心配してたのよ？ まあいいわ、君は私が手招きするまでここにいなさい」

嶋谷はそう言うつと教室に戻って生徒に何か話している。クラスからは歓声上がる。どうやら俺の事を話しているらしい。一時して嶋谷が扉を開け、手招きをした。

へえ〜いと俺はあいまいに返事をし、扉の手前で立ち止まり教室内を見渡す。

女子からはキヤーと黄色い歓声が、男子からもオーツと声上がる。みやびを探す。みやびは奥の一番後ろで俺に向かって大きく手を振っている。

「速く入りなさい」

嶋谷がせかす。俺はそれに従い、教室へと足を踏み入れる。

「転入生の白鳥 翼君。皆、仲良くするように」

嶋谷の紹介が終わると横にずれ、俺に自己紹介するように促す。

「えっと、白鳥 翼です、って紹介があったから知ってるか・・・

あっ、珍しい名前だけどよろしく」

クラスからは笑いが巻き起こる。

はあ 転校初日から変な奴って印象を与えてしまつとは・・・まあ速くなじめそうだからいいか

「確かに白鳥 翼って名前は出来すぎだよな」

みやびの一言で笑い声が大きくなる。

「白鳥の席は・・・」

嶋谷はクラスを見渡す。 みやびはすかさず手を上げる。

「僕の後ろ、空いてる」

嶋谷は場所を確認する。

「そうね、そこしか空いていないわね」

そう言っつて嶋谷は俺をその席に座るように、と指示する。

俺はみやびの後ろの席に着く。

「やったあ、翼が後ろだ あ、でも僕が前だったら翼の事見れないじゃん！ 先生、席変えてよお」

みやびは祈るようなポーズをしたが、とりいってもらえなかった。

「ほらみやび、授業を始めるから座りなさい」

みやびはえく、と言いつつ渋々従った。

その日の昼休み、俺に回りにはたくさんの生徒が集まった。

「どこから来たの？」

「何の部活に入るの？」

「今、彼女はいるの？」

さまざまな方向から色々な質問が飛び交う。

俺はその質問に丁寧に答えて行く。部活は野球部に入るつもりで

彼女はいる。 みやびだ。 みやびとは出会ってすぐ告られて俺は

それをOKした。

「ねえ、君が転校生？」

声をかけてきたその男は丸刈りでがっちりとした体形だ。

「そうだけど」

俺はそっけなく答える。

「そうか、やっぱりな。体つきもいいし、顔も整ってる。おま

けに野球まで上手いときた。マスコミに騒がれない訳がない」

丸刈りは一人で淡々と喋ってる。

「ねえ、誰？」

「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は坊屋ぼつせ 春道はるみち、野球部の時期キャプテンでポジションはキャッチャー。よろしく」
坊屋は俺に握手を求めた。

「よろしく」

俺はその手を握る。

「ああ良かった、いい人そうぞ。新聞とか雑誌には極悪高校生として書いてあったからもっといかついのを想像していたけど・・・意外と丸いんだね」

丸いって顔が？ それって俺が太ってるってことか？ 俺は眉をひそめる。

「い、いやそう言う意味じゃないって・・・ もっと良い方にとらえようよ」

坊屋は慌てて訂正する。 なんだか面白い奴だ。

俺は口元を緩める。

「俺がこの学校を案内してやるよ！」

坊屋は笑顔で言う。

「お、おう」

俺と坊屋は女子たちのブリーイングを受けながら教室を出た。

「お前、前の学校でもこんなにもててたのか？ 大変だな！ ここが女子更衣室でこっちは体育倉庫、そしてこれが我が校の女子トイレ！」

坊屋がにやけながら説明をする。

「おい、案内する場所おかしくね？」

俺は立ち止まる。

「え、男子が興味をそそりそうなところを紹介しているんだけど・・・ いや？」

坊屋は変に上目づかいを使いながら言った。

俺は首を大きく縦に振った。

「そうか、じゃあ今からは真面目にやるぞ」
外に出て校舎の隣にある小屋へと向かう。

「ここが野球部の部室だ。 どうだ、綺麗だろ？」

その建物はまだ建って間もないらしく、確かにきれいだった。

「そしてこれがうちのグラウンドだ」

涼宮学園のグラウンドは白土で帝都までではないが、よく整備されている。 そしてはしの方には山なりになった神聖に場所、マウンドがあった。

「どうだ、一球投げてみるか？」

坊屋はどこから持ってきたのか、ボールとグローブを俺に渡す。

「いいね、やるうー！」

俺は上着を脱ぎ、マウンドを慣らし、あたりを見渡す。

「うわ、さぶっ！」

校舎の窓からは何事かとこっちを見る生徒がいて、その中にみよびもいた。

みよびもこっちに気付いたのか手を振っている。

一度深呼吸をし、俺はモーションに入る。

大きく振りかぶり、足を上げ少しの“間”を開け右足で地面を踏みこみ、左腕を鞭のようにしならせ、白球を投げる。

ズバーーン

！？

ミットに収まった時の音、今までに聞いた事がないくらい気持ちのいい音だった。

「ナイスボール」

坊屋はボールを俺に返し、再び構える。俺は振りかぶり、白球

をミットにめがけて投げる。

ズバーーン

なんだこの音・・・

俺の球は速くなっていない。夏の予選で負けて以来、ボールも触っていないから当たり前だ。なのにこんな音が出るって・・・

俺は坊屋を見る。坊屋は満足そうな顔でボールの収まったミットを見ている。

間違いない

あの男、ただものではない。

「すげえなお前の球、二球取っただけでも分かった。あの球は生きてる」

「お前、なにものだ？」

俺の質問に坊屋は首をかしげる。

「俺？俺は坊屋春道だけど・・・」

「そうじゃなくて・・・ああ、なんて言えばいいのかなあ　お前、昔どこで野球してた？」

すると坊屋は困った顔をした。

「昔って俺野球始めたの高校に入ってからだけど・・・　それまではじっちゃんが教えてくれたけど」

こいつのじいさん？　素人にここまでのキャッチングをするように出来るとは・・・

こいつのじいさんすげえなあ

「あれ、お前はまだ知らなかったっけ？　俺のじっちゃんこの学校の校長なんだけど・・・」

学園の校長・・・　なんて言っただけ

「しんねえか、俺のじっちゃんは東堂　広行って言って昔野球選手だったんだ」

あ、ああ！そうだ、そうだ！

東堂広行ってどっかで聞いた事があると思ったけどよく考えたら有名な人じゃないか！

東堂広行は昔のプロ野球選手で、頭脳派の捕手として球界を湧かせたスーパースターだ。

そんなスーパースターの孫がこんな所にいるとは・・・それも俺の球をこれから取る事になるなんて。

なんかきつとこれって運命なんだなあ。

こいつとなら行けるかもしれない・・・

・キーンコーンカーンコーン・・・

「やばい、早く戻らなえと遅れるぞ」

坊屋はそう言って走りだした。

「おい、待てよ！」

俺はそう言っただけで坊屋を追いかけられるけど坊屋は足が速く、見失ってしまった。

「あいつ・・・無駄に足速いな」

13話：お誘い

俺も教室に戻り、また女子からの黄色い歓声を浴びることとなった。みやびは俺が教室に入ってくるのを確認すると、すぐに俺の胸に飛び込んできた。

「おかえり〜、翼って本当にすごい人だったんだね！ あんなに速い球投げる人、初めて見たよ！！」

みやびは目をキラキラさせながら俺を見ている。

「そうか？ まあ確かに俺の球は速いけどな」

「少しは謙遜しろよ！」

ぱちん

みやびが俺の頭を叩き、心地良い音がする。

「ってかお前、謙遜の意味分かんのか？ 頭良くなったな」

するとみやびは頭をかきながらいやあ、実は…知らない、と耳を澄まさなければ聞こえないほど小さな声で呟く。

知んねえのかよ！

俺は心の中で突っ込む。

みやびは目をつぶって首をすくめながら俺の方に頭を出す。

・・・どうやら俺に突っ込まれるのを待っているようだ。

カシャッ！

みやびは予想外の効果音にびっくりしたのか、目を見開いて思いつきり『アホ』な顔になっていた。

カシャッ！

またさつきと同じ効果音が鳴る。

「バカ！写真とんなよ」

みやびは俺の携帯を取ろうとするが、いかんせん186cmと154cmだ。大人と子供くらいの差がある。

届くはずがない。みやびもその事にきずいたのか、考えるポーズをとった。

みやびは一瞬間いたような顔を見ると俺の前に立ちふさがる。顔がにやけている。

俺はみやびの頭を撫で、お前は可愛いな、と言おうとしたその刹那・

うぐえつつつつ

俺は今までに身に覚えのないくらいの激痛を自分の……男の人達にとつていつち番大事なところを感じた。

下半身を見下ろすとみやびの足が俺の股の間に挟まっていた。

「てへ？」

みやびはうづくまっている俺から携帯を取り上げ、何やらいじくっている。それを見てみやびは嬉しそうに笑う。

「バカ！！ここは一番叩いたり蹴ったらいかん所だろ！第一これで子供が出来なくなったらどうすんだよ」

「大丈夫だよ。そんな時は僕が一生面倒を見てやるから……」

一生つて…それってプロポーズ？？

・
・
・
・

俺もみやびも黙り込んでしまった。

「なんとか反応だけでもいいからしてくれよ。言ったこっちが恥ずかしいじゃんか！」

みやびは口を尖らせる。その顔は真っ赤だった。

「なあ、見てよ」

さっき俺から奪った携帯の待ち受けをこっちに向ける。みやびの写真だ。

「浮気防止……」

「ほんとにみやびは可愛いな」

俺はみやびの頭を撫でる。やべえ、幸せだ！

「今日の夜会える？」

みやびが赤い顔のまま尋ねる。

部活も明後日からだし、今日は何も予定はない。

「うん、いいよ」

「じゃあ7時に駅前に集合ねっ」

みやびはそう言うところかへ行ってしまい、学校には戻ってこなかった。

14話：待ち合わせの10分後

待ち合わせの5分前、俺は待ち合わせの駅に着いた。俺はカバンから携帯を取り出し、適当にいじる。

それからどのくらいたっただろうか。5分、いやそれ以上たってるかもしれない。

俺は携帯で時間を確認する。7時10分

待ち合わせから10分の遅刻だ。まあこのくらいなら良くある事。

前は2時間も遅れたのに謝りもせず、その事で1週間口もきかなかった。

それでも不安になり、辺りを見渡す。

!?

俺の目線の先……………そこにはもう会わないと思っていた、会えないと思っていた人が……

「……綾……?」

その声は言葉にもならないくらい小さい。

「……翼」

彼女もこっちに気が付く。

「おつまたせ、いやあ着て行く服に迷ってさあ」

後ろからみやびが俺に抱きつく。俺がみやびにとって一番はち合わせたらいけない人と再会したとも知らずに……

・
・
・

「誰？」

みやびは俺の前に立っている彼女の事を尋ねる。

「綾・・・前に話した元カノ」

俺は綾とは目を合わせずに答える。

「ああ！でも翼の元カノがあのだ田崎綾だったとは知らなかったな」

・
・
・

「どうしたの？」

みやびが俺の顔をのぞく。

「翼：新藤君から学校やめたって聞いたけど何で？それにその人誰？」

綾は涙ぐんでいる。

「翼にとって私は過去の人なんだね、私は・・・私はずっと翼の事を思ってたのに・・・」

違うんだ・・・いや、違わない。俺にとって綾は、もう・・・

もう過去の人になっていた。

そうじゃないとみやびとも付き合えない。でも俺は綾の事を忘れないといけなかった。忘れないと生きては行けなかった。好きなのに、好きすぎてこんなに苦しむなんて・・・

「もういい、翼なんて・・・翼なんか・・・だいつ・・・」

綾は涙を拭き、車道に飛び出す。

「危ない！！！」

14話・待ち合わせの10分後（後書き）

物語の設定が一部変更になったところがあります。（7話、8話）

15話：死ぬのか

俺は急いで綾の元に向かう。

「綾……？綾、綾！」

いくら俺が揺すつても俺の中にいる綾はピクリともしない。

綾の口元に耳を寄せたが息をしていないし、心臓の鼓動も止まっている。

？だろ……綾が、し……綾がしん……だ……？

「お願いだ、目を覚ましてくれよ……お願いだよ、誰か助けてよ……神様……」

その瞬間だった。あたり一面が真っ白になる。そしてその先には人影が見える。

「私をお呼びでしょうか？」

その声は聞くだけで心が落ち着くような、暖かい声だった。

「神……さま？」

俺は今見ているものを疑う。

「はい。正式にはリリスといたのですが、あなた方の世界ではそう呼ばれております」

自分の事をリリスと呼ぶ『それ』は男でも女でもない、中性的な顔をしている。

「あなたは私を呼んだ。それは何か私に願いがあったから、そうでしょうか？」

俺は頷く。

「あなたは非常に純粹だ。その願い、私が叶えましょう」
それはほほ笑む。

・
・
・

長い沈黙

・
・
・

「どうしたんですか？ 早く願いをおっしゃって下さいよ」

この沈黙を破ったのはリリースだった。

「あ、ああ・・・そうだ！ 綾を…綾を助けてくれ」

なかなか信用はできないが今の俺にはこのリリースしか頼れるものがない。

「助ける、といたしますと？」

リリースは相変わらず穏やかな口調だ。 少し落ち着く。

「綾が車に引かれて…息が無い」

「ほう、車ですか… 『原動機の動力によって推進し、軌条によらないで進路を変更できる。 進路と速度を、運転者の意思に基づき自由に制御できる』といわれているあれですよ？ あれは実にすばらしい。 火星人もあれを元にUFOを作ってますし・・・ 実に面白い」

UFO？ いや、今はそんな事は関係無い。 綾は助かるのか？

「分かりました。 その綾さんは私が救ってあげましょう」

リリースは胸を張る。

「ほんとか？」

「ええ、私は？をつきません。 ただ、一つ条件が・・・」

「ありがとう！！ これで綾は、綾は・・・」

俺は天を見上げる。 目の前が曇っている。

「話は最後まで聞いてください。 確かに綾さんは助かります、しかしそれには誰かが死ななければならぬ。 その人は綾さんがも

つとも愛する人・・・ その方を失う事で人は生き返る事が出来る。そして綾さんがつとも愛している方は・・・白鳥翼さん。あなたです。 どうしますか？」

俺が死ぬ事で綾は生き返る事が出来る・・・ どうするか、なんて愚問だ。 答えは既に決まっている。

「それでもいい。 綾を助けてくれ」

俺は綾を裏切った。 なのに綾はまだ俺の事を愛してくれている。

「分かりました、では白鳥翼さん。 あなたをあつちの世界に送ります。 最後になにか綾さんに伝える事はありますか？」

綾は俺の人生に大きな大きな幸せをもたらしてくれた・・・ その時間が色あせる事はない

「ありがとう・・・ それだけでいい」

俺は・・・綾の人生でどんな存在だったんだろうか

「分かりました。 私が責任を持ってお伝えします」

俺が綾に・・・幸せを与えた存在だったら嬉しいな

「では目をつぶって楽にしてください」

俺は軽く深呼吸をして、目を閉じる。

俺は今までの人生を振り返ってみる。 7歳の頃、俺に父親がいなくていじめられていた時は母さんが優しく抱きしめてくれた。 その母さんが死んで落ち込んでいた俺に救いの手を差し伸べてくれた綾。 綾がいたから甲子園っていう夢が出来たんだ。 一度は夢破れ、荒れていた俺をそれでも好きだとみやびは言ってくれた。 そして坊屋がもう一度夢を見させてくれた。 こうして振り返ってみると俺は、色々な人達に支えられながら生きていた事を再確認できる。

ああ、なんだか頭がぼやけてきた。 俺は死ぬのか・・・

俺は幸せだった。 たくさんの仲間に囲まれて、その日常は時に穏

やかで、時にはすごく荒れていて・・・

白鳥翼という人間は良い人間ではなかったかもしれない。それでもこれだけ信頼できる仲間たちがいるんだから俺は幸せ者だ。

眠い・・・

その時が近づいてきたのだろう。意識がだんだんと遠ざかっていく。

あれはいつだったか・・・

誰か知らない、多分近所のおじさんとキャッチボールをしたんだ。

あの時は野球というものを知って、その面白さにのめりこんでいった・・・

16話：《おじさん》

『いくよ・・・えい!』

その手から放たれたボールは3m程離れている《おじさん》のグローブへと入る。

『上手だね』

《おじさん》に褒められた僕は少し照れながらも誇らしく胸を張った。

『僕ね、大きくなったら野球選手になるの。それで投げる人になるんだ』

《おじさん》はボールを投げ返す。

『わぁ』

《おじさん》が投げたボールは僕のグローブをはじき、後ろへとそれる。

『そうか、でもそんなんじゃないよ』

『え?じゃあどうしたらなるのかな・・・』

僕はボールを拾って力いっぱい投げる。

ボールは《おじさん》とはまったく違う方向へと飛んでいく。

『そうだなあ、好き嫌いせずにいっぱい食べて、いっぱい寝て、いっぱい練習して、そして野球が大好きだっという気持ちがあれば君ならきつとなれるよ・・・』

まだ言葉の意味は分からなかったがその言葉には妙に説得力があり、僕は頷く。

《おじさん》はボールを拾いに草むらの中へと入っていく。

『お、あったあった。いくぞ、それ』

ボールはちゃんと僕のグローブの中に収まった。

ボールを取った右手は痛かったが、それ以上にボールが取れたというところがとてもうれしかった。

『よく取ったな、えらいぞ』

『《《おじさん》》は僕の頭を撫でる。
うん！ 野球って楽しいね・・・お父さん！..!』

お父さん・・・？

17話：両親

『うん！ 野球って楽しいね・・・お父さん!!』

この、嬉しそうな声が俺の頭の中で何度も再生される。

この記憶は・・・俺と・・・父さんの・・・思い出？ きっとそうなんだろう。

今まで俺の中で父さんは写真だけの存在だった。でも俺の頭の中にもちやんと父さんがいて・・・その父さんは今まで見た父さんの中で一番かつこよくて、一番輝いていて・・・死ぬ前に父さんの事、思い出せてよかった。

『・・・翼』

ん・・・？

『翼、聞こえますか？』

何か、とても懐かしい声がする。この声は・・・

『母さん・・・？』

俺は暗闇の中で声を上げる。

『は、そうです。あなたはまだこっちに来てはいけない』

それは悲しそうな声だった。

『でも俺が逝かないと綾が死んじゃう。それなら俺が死んだ方が

・・・』

俺が死んだ方がいいんだ。

『それでも・・・』

『俺は・・・もう決めたんだ』

俺は今にも出てこようとする涙を必死にこらえる。

『翼、君が死ぬ必要なんか全然無いんだ』

またどこからか、次は聞き覚えのない男の音がする。

『大丈夫だよ。翼は生きていいんだ』

俺の目の前に、昔のままの父さんが現れる。

『でも・・・』

『いいんだ。第一、綾ちゃんは死んでなんかいない』

・
・
・え？

『綾は・・・死んでない・・・？』

『ああ、確かに綾ちゃんには車に引かれた。でも運良く軽傷で済んだんだ』

あまりに話の流れが急で事の整理がつかない。

『じゃあ、あのリリースは？』

『リリース?! あいつ、またやったのか・・・リリースっていうのは人を死に追い込んで寿命を奪う死神だ。でも不当に寿命を奪ったから死界裁判で有罪となつて今は執行猶予期間中だったんだ。あと300年もすれば執行猶予が解けたというのに... まったく愚かな奴だ』

死神? 死界裁判? 何だか余計に分からなくなってきた。

『綾は・・・綾は助かったのか?』

『ああ』

『ええ』

母さんと父さんは口をそろえて言った。二人は顔を見合わせて笑った。

よくは分からないけどどうやら俺はまだ生きられるらしい。そして綾は・・・まだ生きていた。

ヤバイ・・・

綾は無事だった。

その事実を知った瞬間今まで我慢してきた涙が一気にあふれかえし

てきた。

俺は数分後、落ち着くと母さんが口を開く。

『でも何でお父さんが綾ちゃんの事を知ってるの？』

確かにそれは俺も気になっていた、何でだろう。

『いや、それはな・・・俺は高校時代好きな人がいてな、その人は野球部のマネージャーだったんだ。その人も俺の事が好きだという噂もあつたんだが、俺は告白する勇気がなく高校卒業。二人は離れ離れになり、次に会った時は二人とも既婚者で子持ち。そこで綾ちゃんの事も知つたんだ。いづれ二人が付き合う事になったらしいなって話していたんだが、まさか本当に付き合う事になるとはなあ・・・』

へえ〜 父さんにそんな過去があつたなんてなんか意外・・・

俺の中で父さんの人物像は天才肌でいつもクールなイメージだったけど、実は意外と茶目っけがあつて誰よりも努力家で・・・そんな父さんを俺は誇りに思う。

それから俺達親子は昔話に花が咲いた。

18話：帰還

『翼、もうそろそろ帰らないと皆心配するよ』

母さんは帰るよう促すが、まだここにいたい。

『翼、もう行きなさい。大丈夫、俺達はいつも翼の中にいる』

父さんはあの時のように俺に頭を撫でる。

『父さん、俺はもう子供じゃないよ』

『うるさい！俺にとってお前はずっと子供だ』

俺の頭をグシャグシャと荒く撫でる父さんの声は震えていた。

『うん、じゃあもう行くね』

俺は両親に背を向け、俺が生きる世界へと歩き出す。

『ありがとう、父さん、母さん・・・』

本当にありがとう・・・

そうして俺は両親と永久の別れを・・・いや、別れなんかしない。

父さんも母さんも俺が想い続ける限り、俺も中で生きてる。そ

して俺が二人の事を忘れる事はない・・・

それでもけじめとしてこの言葉わ言わなければいけない。

さようなら・・・愛してる・・・

最終話：Love、Dream、Happiness

はあ、はあ……

俺はそつと目を開ける。知らない天井。ここは……どこ？

「翼！気が付いたんだね！！良かった、良かった……」

綾？あれ、俺どうしたんだ？

みやびとのデートで綾と再会して、綾は車道に飛び出して車に引かれた……記憶はここまでしかない。

「あのね、みやびっていう人からこれを翼に渡して……」
それは小さな手紙だった。

☐

Dear 翼

元気？なわけないか……翼が意識不明の重体だって聞いたから心配だけどきつと大丈夫。だって翼には綾ちゃんっていう心強いパートナーがいるんだもん。あの時、僕気付いちゃったんだ。ああ、翼は綾ちゃんの事をまだ好きなんだなって……悔しいけどお似合いの二人だもん。きつとうまくいくよ……僕はこの恋を応援する。

それから僕、夢が出来たんだよ。あの僕にだよ?!これも翼のおかげだね。今はその夢に向かって猛勉強中！翼も野球頑張ってるね、つてあんなに速い球投げてるんだから僕が言わなくても大丈夫か……じゃあ、ばいばい

p.s. 僕に愛と夢と、そして幸せをありがとう

rom みやび

F

」

みやび・・・

きつとみやびはすごく辛い想いをしただろう。好きな人の恋を応

援するなんて俺には出来ない。

みやびの涙でしわくちやになったこの手紙は俺の一生の宝物となる
だろう。

「綾・・・」

体を綾の方に向ける。

「何？」

綾もこつちを向く。

「・・・愛してる」

!!

そうだ、思い出した。あの世での事、そして両親の事・・・

「私もだよ」

二人は唇を重ねる。

綾の唇はしょっぱかった。これは・・・涙？

「何で泣いてるの？」

「翼だつて泣いてるじゃん」

俺は自分のほっぺを触る。

「ほんとだ」

二人は笑い、もう一度口づけを交わす。

そしてゆっくりと一つになった。

ああ、俺はいつたいどれだけの人から愛され、愛してきただろうか・
・・ みやび。新藤、坊屋。母さん、父さん。そして綾・・・俺が
愛し、愛された人々がいるから今の俺が在るし、これからの自分が
作られてゆく。愛というものに限りはない。愛は無限の可能性
を秘めている。時には愛も凶器になるだろう。それでも俺が愛
し、俺を愛してくれた人みんなに喜びと、本当の意味での幸せが来
る事を、切に願う・・・

最終話・Love Dream Happiness (後書き)

紅？ありがとう！

エピソード

「いくぞ・・・それ」

その手から放たれたボールは俺が構えたグローブへと収まった。

「上手くなつたな」

俺が頭を撫でると子供は少し照れて、母親の元に駆け寄る。

「どうしたの？」

綾は子供に尋ねる。

「僕ね、大きくなつたらお父さんみたいな野球選手になるんだ！」

子供は自慢げにそう答える。

「そうか、でもこのままじゃあお父さんみたいになれないぞ。もつといっぱい食べて、いっぱい寝て、いっぱい練習して、そして野球が大好きっていう気持ちを忘れなければきつとなれるよ」

この言葉は父さんから教わった言葉。そしてそれを今、こうして息子へと教えている。こいつがこの言葉をどのようにとらえるかは分からないが、子供の人生の中で役に立つ事が出来ればうれしい。

「うん！」

子供は頷く。

「いくぞ・・・えい」

子供が投げた球は壁に当たり、跳ね返ってきたボールを懸命に追いかける。

「野球って楽しいね、お父さん！」

エピソード（後書き）

Love・Dream・Happinessはこれで完結です。

最後まで自己満足で終わってしまったが、どうか許して下さい。

この物語を最後まで読んでくれた方々。こんな青二才の小説を最後まで読んでくれてありがとうございます。

はるやんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4703q/>

Love,Dream,Happiness

2011年8月1日03時06分発行